

【 復活のトロパリ 第7調 】

ハリスト スカ みよ、なんぢ はじゅう じかに てしを
 神 爾 十 字 架 死

ほろぼ し、と うぞく のた めに らくえんを ひ開
 滅 盗 賊 の 爲 楽 園 開

ら き、けい こ うぢよ のか なしみを なぐさ
 攜 香 女 悲 慰

め、し とに なんぢ が ふく か つして、せ か
 使 徒 爾 復 活 世 界

いにおお なる あわれ みを たまいしをつたえ
 大 隣 賜 傳

させたま えり。
 給

【 階梯者イオアンのトロパリ 第1調 】

ほうし んな る わがしんぷ イオア ンよ、なん
 捧 神 我 神父 爾

ぢは ののじゅうしゃに してに くたいにおけるてん
 野 住 者 肉 體 於 天

し および きせきしゃと あらわれたり。なん
 使 及 奇 跡 者 顯 爾

ぢは ものい みと、けいせいと、きとうと
 齋 警 醒 祈 禱

をも っ て 天のおんしをえ て、しんをもつて
 以 天 恩 賜 獲 信 以

な ん ぢ に は し り つ く も の の れ い た い の や
 爾 趨 附 者 の 靈 體 の 病
 ま い を い や し た も う 。 こ う え い は なん
 醫 給 光 榮 は 爾
 ぢ に ち か ら を あ た え し し ゅ に き し 、 こ う え
 力 與 主 歸 光 榮
 い は なん ぢ に え い か ん を こ う む ら せ し し ゅ に き
 爾 榮 冠 冠 主 歸
 し 、 こ う え い は なん ぢ を も っ て し ゅ う に
 光 榮 は 爾 を 以 衆
 い や し を た も う し ゅ に き す 。
 醫 治 賜 主 歸

【 階梯者イオアンのコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き
 光 榮 は 父 子 と 聖 神 歸
 す 、
 き ょ う ど う し イ オ ア ン 、 わ れ ら の し ん ぷ よ 、 し ゅ
 嚮 導 師 我 等 神 父 主
 は なん ぢ を ま こ と の せ っ せ い の た か き に 、 う
 爾 眞 節 制 の 高 動
 ご か ざ る ほ し 、 そ の ひ か り を も っ て し き よ く を み
 星 其 光 以 四 極 導



ちびくものとして おきたま えり。
者 置 給

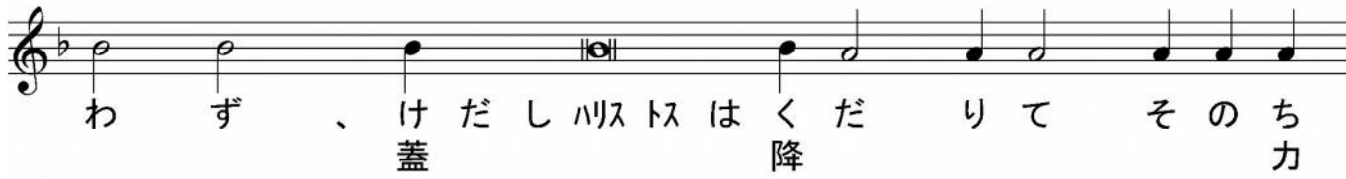
【 復活のコンダク 第7調 】



いまもいつもよよに、アミン。
今 何時 世 世



しのけんはすでにひとびとをとらうるあた
死 権 已 人 人 を 捕 う る 能



わず、けだしハストはくだりてそのち力
蓋 降



からをやぶりてほろぼしたま えり。ぢご
敗 滅 給 えり。ぢご 地 獄



くはしばられ、よげんしゃはどうしんによろ
縛 預 言 者 同 心 喜



こびてよぶ、きゅうせいしゅはしんにおる
呼 救 世 主 信 居



ものにあらわれたり、しんじゃよ、ふく
者 現 信 者 復



か つ して い で よ。
活 出

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と

なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、

ねがものちえめいごあたつみおこなものす そのすくい ため つうかい
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行 う者を棄てずして、其救の爲に痛悔

た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい
を立て、我等卑しくして不當なる 爾 の 諸 僕を、此の時に於ても、 爾 が 聖な

さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの
る 祭壇の光榮の前に立ちて、 爾 に 當然の伏拜讚榮を 奉 るに堪うる者と

しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ
なしし主宰よ、 爾 親ら我等罪人の口よりも 聖 三の歌を受け、 爾 の 仁慈を

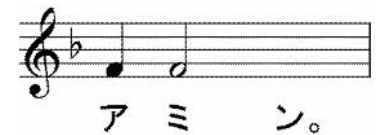
もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が 靈 と 體 と

せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい しょう
を 聖にし、我等に 生涯善功を以て 爾 に 務むるを得せしめ 給え、 聖なる 生

しんぢょ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
神女と古世より 爾 の 喜 を爲しし 諸 聖 人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋 我が神よ、 爾 は 聖なり、我等光榮を 爾 父と子と 聖 神に 献ず、 今も何時も 世 世

に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖 神 聖 勇 毅 聖

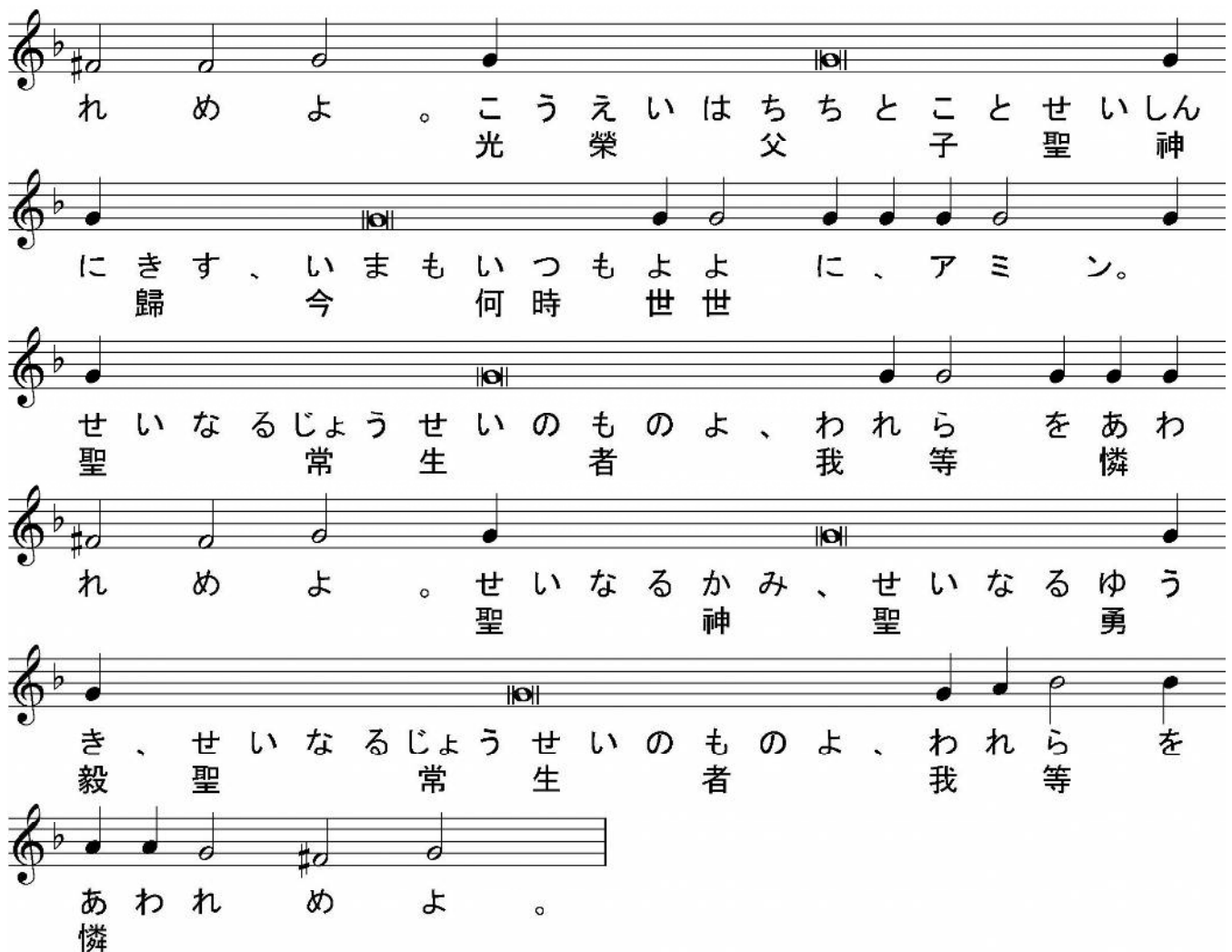
じょうせいのものよ、われらをあわれめ
常 生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
常 生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖 神 聖 勇 毅

せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
聖 常 生 者 我 等 憐



れめよ。こうえいはちちとことせいしん
光 榮 父 子 聖 神
にきす、いまもいつもよよに、アミン。
歸 今 何 時 世 世
せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
聖 常 生 者 我 等 を あ わ 憐
れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
聖 神 聖 勇
き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
毅 聖 常 生 者 我 等 を
あわれめよ。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第7調 及び克肖者の第7調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主は其民に力を賜い、主は其民に平安の福を降さん、



しゅはそのたみにちからをたまひ、しゅは
主 其 民 力 賜 主
そのたみにへいあんのふくをくだ
其 民 平 安 の 福 を 降 だ



さん。

誦經) ^{かみ しよし しゅ けん} 神の諸子よ、^{こうえい せんき しゅ けん} 主に獻ぜよ、光榮と尊貴とを主に獻ぜよ、



さん。

誦經) ^{しよせいじん こうえい あ いわ そのとこ あ よろこ} 諸聖人は光榮に在りて祝い、其榻に在りて歡ぶべし、



【 ^{アポストロス} 使徒經 314 端 エウレイ書6章13節~20節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ しよ よみ} 聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい かみ きょやく たま とき おのれ おおい もの いつ さ ちか} 兄弟よ、神はアヴラアムに許約を賜う時、己より大なる者の一も指して誓うべき

^{ゆえ おのれ さ ちか い われかならずしゅくふく なんぢ しゅくふく ま なんぢ} なきが故に、己を指して誓いて云えり、我必祝福して爾を祝福し、益して爾

^{ま か ごうにん きょやく ところ え けだしひと おのれ おおい} を益さんと。斯くアヴラアムは恒忍して、許約せられし所を獲たり。蓋人は己より大

^{もの さ ちか かつこと かくしょう ちかい かれら およそ そうろん や ゆえ かみ きよ} なる者を指して誓う、且事を確證する誓は彼等の凡の争論を息む、故に神も許

^{やく つ もの おのれ むね かわ さら あきらか しめ ほつ べつ ちかい た} 約を嗣ぐ者に、己の旨の易らざるを更に明に示さんと欲して、別に誓を立てたり、

こ ふたつ かわ もの おい かみ いつわ あた ゆえ われら こ ふたつ もの もつ たしか
 斯の二の易らざる者に於て神は 謊る能わざるが故に、我等斯の二の者を以て確
 なる 慰を得ん爲なり、蓋我等は趨りて我が前に在る 望を執る者なり。此の望は我
 等の 靈の爲に堅くして、動かざる 錨の如し、且幔の内に入る、即 イイススがメル
 キゼデクの班に 循いて、世の司祭長と爲りて、我等の爲に前驅として入りし 所なり。

(比較用 口語訳) 神がアブラハムに対して約束されたとき、さして誓うのに、ご自分よりも上のものがないので、ご自分をさして誓って、「わたしは、必ずあなたを祝福し、必ずあなたの子孫をふやす」と言われた。このようにして、アブラハムは忍耐強く待ったので、約束のものを得たのである。いったい、人間は自分より上のものをさして誓うのであり、そして、その誓いはすべての反対論を封じる保証となるのである。そこで、神は、約束のものを受け継ぐ人々に、ご計画の不変であることを、いっそうはっきり示そうと思われ、誓いによって保証されたのである。それは、偽ることのあり得ない神に立てられた二つの不変の事がらによって、前におかれていた望みを捕えようとして世をのがれてきたわたしたちが、力強い励ましを受けるためである。この望みは、わたしたちにとって、いわば、たましいを安全にし不動にする錨であり、かつ「幕の内」にはいり行かせるものである。その幕の内に、イエスは、永遠にメルキゼデクに等しい大祭司として、わたしたちのためにさきがけとなって、はいられたのである。

【 アポστόロス 使徒經 229 端 エフェス書 5 章 9 節～19 節 】

誦經) けいてい ひかり こ ごと おこな けだしん み およそ じあい こうぎ しんじつ あ なんぢ
 兄弟よ、光の子の如く行え。蓋神の實は凡の慈愛と公義と眞實とに在り。爾
 らかみ よろこ ところ なに つまびらか み むす くらやみ おこない あづか なか
 等神の悦ぶ所の何なるを 審にせよ、實を結ばざる暗昧の行に與る勿れ、
 むしろこれ せ けだしかれら ひそか おこな こと い または べ およ せ こと
 爾之を責めよ。蓋彼等が隱に行う事は、言うも亦耻づ可し。凡そ責めらるる事は
 ひかり よ あらわ けだしおよ あらわ こと ひかり ゆえ い い ものお し
 光に由りて顯る、蓋凡そ顯るる事は光なり。故に云えるあり、寐ぬる者起きよ、死
 より復活せよ、ハリストス爾を照さん。是を以て視よ、行を慎みて無智の者の如く
 せず、乃智ある者の如くせよ、時を惜むべし、日は悪しければなり。是の故に思慮なき者
 な なか すなわちかみ むね なに さと またさけ よ なか こ よ ほうとう
 と爲る勿れ、乃神の旨の何なるを覺れ。又酒に酔う勿れ、此れに由りて放蕩あり、
 すなわちしん み せいえい かしょう ぞくしん しふ もつ くち とな ころろ わ
 乃神に満てられよ。聖詠と歌頌と屬神の詩賦とを以て、口に唱え、心に和して、
 しゅ さんび
 主を讚美せよ。

(比較用 口語訳) 光の子らしく歩きなさい—— 光はあらゆる善意と正義と眞実との実を結ばせるものである—— 主に喜ばれるものがなんであるかを、わきまえ知りなさい。 実を結ばないやみのわざに加

わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい。彼らが隠れて行っていることは、口にするだけでも恥ずかしい事である。しかし、光にさらされる時、すべてのものは、明らかになる。明らかにされたものは皆、光となるのである。だから、こう書いてある、「眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから、立ち上がりなさい。そうすれば、キリストがあなたを照すであろう」。そこで、あなたがたの歩きかたによく注意して、賢くない者のようにではなく、賢い者のように歩き、今の時を生かして用いなさい。今は悪い時代なのである。だから、愚かな者にならないで、主の御旨がなんであるかを悟りなさい。酒に酔ってはいけない。それは乱行のもとである。むしろ御霊に満たされて、詩とさんびと霊の歌とをもって語り合い、主にむかって心からさんびの歌をうたいなさい。

【 アリルイヤ 主日第7調 及び克肖者の第7調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{しじょうしゃ しゅ さんえい なんぢ な うた び かな} アリルイヤ、至上者よ、主を讚榮し、爾の名に歌うは美なる哉、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{なんぢ あわれみ あさ の なんぢ まこと よ の び かな} 爾の憐を朝に宣べ、爾の眞を夜に宣ぶるは美なる哉、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{きた しゅ うた かみわ すくい かため よ} 來りて主に歌い、神我が救の防固に呼ばん

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 浄き光を輝かし、我が思念
 の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を
 畏るる 畏をも入れて、我等が 悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所
 を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、
 爾は我が 靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし
 て生命を 施す 爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 マルコ福音書40端 9章17~31節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) マルコ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時或人イイスに就きて、伏拜して曰えり、師よ、我瘡の鬼に憑
 られたる我が子を爾に携え來れり。鬼は何處に彼を執うとも、投げ仆し、彼沫を噴き、
 齒を切み、體枯る、我爾の門徒に之を逐い出ださんことを請いたれども、彼等能わざり
 き。イイス彼に答えて曰く、噫信なき世や、我何時までか爾等と偕に在らん、何時まで
 か爾等を忍ばん、彼を我が許に携え來れ。乃彼を携え來れり、彼イイスを見れ
 ば、鬼忽彼を拘攣させ、彼地に仆れ輾びて沫を噴けり。イイス其父に問えり、彼に
 斯く爲りしは何の時よりか。曰えり、幼き時よりなり。鬼は彼を滅さん爲に、屢火
 に又水に投じたり。爾若し何をか能せば、我等を憫みて、我等を助けよ。イイス之

い なんぢも いくばく しん よく しん もの よく どうじ ちち
に謂えり、爾 若し幾 何か 信ずることを能せば、信ずる者には能せざることなし。童子の父

ただち なみだ た よ い しゅ われしん わ ふしん たす たみ は
直に 涙を垂れて、呼びて曰えり、主よ、我 信ず、我が不信を助けよ。イイス民の趨せ

あつま み おき いまし これ い おし みみしい き われなんぢ めい かれ
集るを見て、汚鬼を 禁めて、之に謂えり、瘡にして 聾なる鬼よ、我 爾に命ず、彼よ

い ふたたびかれ い なか きさけ はなはだ かれ ひきつけ い かれ し
り出でて、再 彼に入る勿れ。鬼 號びて、甚 しく彼を拘 攀させて出でたり、彼は死せ

もの ごと おお ものかれし い いた そのて と かれ おこ
し者の若くなりて、多くの者 彼死せりと云うに至れり。イイス 其手を執りて、彼を起し

かれすなわちた いえ い とき そのもととひそか かれ と われら これ お
たれば、彼 即 立てり。イイス 家に入りし時、其 門徒 私に彼に問えり、我等が之を逐

い あた なん ゆえ かれい きとう ものいみ よ こ たぐい い
い出だす能わざりしは何の故ぞ。彼曰えり、祈禱と 齋 とに由らざれば、此の類は出づる

え かねらかしこ い す かれ ひと これ し ほつ
を得ざるなり。彼等彼處を出でて、ガリラヤを過ぐ、彼は人の之を知らんことを欲せざりき。

けだしそのもとと おし ひと こ ひとびと て わた ひとびとかれ ころ ころ のちかれだい
蓋 其門徒に教えて、人の子には人々の手に付され、人々 彼を殺し、殺されて後 彼第

さんじつ ふくかつ い
三日に復活せんと曰えり。

(比較用 口語訳) 群衆のひとりが答えた、「先生、おしの霊につかれているわたしのむすこを、こちらに連れて参りました。霊がこのむすこにとりつきますと、どこでも彼を引き倒し、それから彼はあわを吹き、齒をくいしばり、からだをこわばらせてしまいます。それでお弟子たちに、この霊を追い出してくださるように願いましたが、できませんでした」。イエスは答えて言われた、「ああ、なんとという不信仰な時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。いつまで、あなたがたに我慢ができようか。その子をわたしの所に連れてきなさい」。そこで人々は、その子をみもとに連れてきた。霊がイエスを見るや否や、その子をひきつけさせたので、子は地に倒れ、あわを吹きながらころげまわった。そこで、イエスが父親に「いつごろから、こんなになったのか」と尋ねられると、父親は答えた、「幼い時からです。霊はたびたび、この子を火の中、水の中に投げ入れて、殺そうとしました。しかしできますれば、わたしどもをあわれんでお助けください」。イエスは彼に言われた、「もしできれば、と言うのか。信ずる者には、どんな事でもできる」。その子の父親はすぐ叫んで言った、「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」。イエスは群衆が駆け寄って来るのをごらんになって、けがれた霊をしかって言われた、「おしとつんぼの霊よ、わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度と、はいって来るな」。すると霊は叫び声をあげ、激しく引きつけさせて出て行った。その子は死人のようになったので、多くの人は、死んだのだと言った。しかし、イエスが手を取って起されると、その子は立ち上がった。家にはいられたとき、弟子たちはひそかにお尋ねした、「わたしたちは、どうして霊を追い出せなかったのですか」。すると、イエスは言われた、「このたぐいは、祈によらなければ、どうしても追い出すことはできない」。それから彼らはそこを立ち去り、ガリラヤをとおって行ったが、イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。

司祭) 彼の^か時^{とき}、ガリラヤ、デカポリ、イエルサリム、イウデヤ、イオールドンの外^{そと}より衆^{おお}くの民^{たみ} 彼^{かれ}に 従^{したが}え
 り。イスス^{ぐんしゅう} 群衆^み を見て、山^{やま}に登^{のぼ}れり、既^{すで}に坐^ざせしに、其^{その}門徒^{もんた} 彼^{かれ}に就^つけり。彼^{かれ} 口^{くち}を啓^{ひら}きて、
 之^{これ}を教^{おし}えて曰^いえり、神^{しん}の貧^{まづ}しき者^{もの}は 福^{さいわい} なり、天^{てん}國^{こく}は彼^{かれ}等^らの有^{もの}なればなり。泣^なく者は
 福^{さいわい} なり、彼^{かれ}等^ら 慰^{なぐさめ} を得^えんとすればなり。温^{おんじゅう} 柔^{もの} なる者^{さいわい}は 福^{かれら} なり、彼^{かれ}等^ら地^ちを嗣^つがんとすれ
 ばなり。義^ぎに飢^うえ 渴^{かわ}く者^{もの}は 福^{さいわい} なり、彼^{かれ}等^ら飽^あくを得^えんとすればなり。矜^{あわれみ} 恤^{もの}ある者^{さいわい}は 福^{かれら} なり、
 彼^{かれ}等^ら矜^{あわれみ} 恤^えを得^えんとすればなり。心^{こころ}の清^{きよ}き者^{もの}は 福^{さいわい} なり、彼^{かれ}等^ら神^{かみ}を見^みんとすればなり。和^わ平^{へい}
 を 行^{おこな}う者^{もの}は 福^{さいわい} なり、彼^{かれ}等^ら神^{かみ}の子^こと名^なづけられんとすればなり。義^ぎの爲^{ため}に窘^{きんちく} 逐^{ちく}せらるる者^{もの}
 は 福^{さいわい} なり、天^{てん}國^{こく}は彼^{かれ}等^らの有^{もの}なればなり。人^{ひと} 我^{われ}の爲^{ため}に 爾^{なんぢら}等^らを 詬^{のし}り、窘^{きんちく} 逐^{ちく}し、爾^{なんぢら}等^ら
 事^{こと}を 譎^{いつわ}りて 諸^{もろもろ}の悪^あしき言^{ことば}を言^いわん時^{とき}は、爾^{なんぢら}等^ら 福^{さいわい} なり、喜^{よろこ}び 樂^{たのし}めよ、天^{てん}には
 爾^{なんぢら}等^らの 賞^{むくい} 多^{おほ}ければなり。

(比較用 口語訳) こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨルダンの向こうから、おびたしい群衆がきてイエスに従った。イエスはこの群衆を見て、山に登り、座につかれると、弟子たちがみもとに近寄ってきた。そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて言われた。「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるであろう。柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであろう。あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるであろう。心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう。平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう。義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。わたしのために人々があなたがたをののしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである。喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報いは大きい。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは
 主 光 榮 爾 歸 光 榮
 はんぢにきす。
 爾 歸

※ 聖体礼儀③ (聖大ワシリイ) へ